

柔らかいリードの勧め

株式会社 ドルチェ楽器
代表取締役 安川 透

高校生になるまでに吹いたことのある管楽器は、小学校の授業で習ったリコーダー（縦笛）だけ。私はリコーダーが大好きで、聞き覚えたアニメの主題歌など登下校時に道で吹き鳴らす少年でした。

その私が高校生になって吹奏楽部に入部の希望を伝えた上級生から「これ、吹いてみ」と言って渡されたのがクラリネットで、今から45年前の1971年、高校1年生のときのこと。

大きな黒い物体を手渡され戸惑いました。リコーダーを吹く時と同じように、そっと息を入れてみましたが息の音しか出ません。上級生から「下唇を下の歯に巻き込むようにしてマウスピースを咥えて、もっと強い息で吹いてみて」と言われ、吹いてみるとギャー!!というアヒルを踏み潰したような音がしてびっくりしました。これが私のクラリネットという楽器との出会いでした。

それから死に物狂いでクラリネットと格闘し、大学に進学して吹奏楽やオーケストラに所属する頃には、技術も上達したのですが、就職してからは毎日練習が可能だった学生時代とは違い、練習時間を取ることができなくなっていきました。

それでも週に1~2回、練習を試みました。しかし、徐々にクラリネットを吹くことがキツいと感じるようになったのです。あまりの辛さに遂にはクラ

リネットを演奏することを断念せざるを得なくなっていました。

当時私は、バンドレンの青箱の3半という比較的硬いリードを使っていました。「リードは3半以上を使いなさい」という先輩や先生からの指導があり、「上手い人ほど硬いリードを使う」という迷信があったからです。この時にリードを軽くする事を試みたら良かったのですが、そんなことを思いつかず、結局クラリネットを吹かなくなりました。それが1978年の頃でした。

それから35年ほどが経ちました。

2013年に母校の高校の吹奏楽部が「創部50周年記念演奏会」を開催することとなり、OB会の会長を務めている私は780名の卒業生に「楽器を続けている者はみんな集まれ!」と号令を掛けました。

100名近いOBが名乗りを挙げてくれました。ところが、そのうちクラリネットは私を含めてたった9名。

OB780名の内、クラリネット経験者は280名くらいいるはずですが。何人かに尋ねてみたところ、みんな口を揃えたように「吹くのが辛くなって辞めた」とのこと。やはり私と同じ理由でクラリネットを吹くことを辞めている人が多かったのです。

学生時代にみんな一生懸命クラリネットを練習したのに、それを大人になって生かせないとはもったいない話だと感じました。

そうして私は、クラリネットを吹くキツさを軽減することを考え始めました。柔らかく吹きやすいリードで良い音色を出す方法はないだろうかと実践に移してみました。

35年前3半を使っていた私は、まず3番にトライ。3半より少しは吹きやすさはあるもののキツさは拭えず、コントロールが難しく音色や音程にも問題を抱えていました。やはり辛くてこのまま続けていく気にはなれないのです。

そこで、思い切って2半のリードにトライ。最初はベー!という音でしたが、暫く試していくうちに

徐々に馴染んできて、結構良い音色を出せるようになってきました。

自分で言うのもなんなのですが、その時はかなり良い音色が出せるようになりました。

そうこうしている内に、それまで考えたこともなかったクラリネットの「発音の仕組み」に興味を持つようになりました。

楽器販売を40年近く経験してきているにも関わらず、恥ずかしながら、私はクラリネットの発音の仕組みを正直分かっていませんでした。私の認識は、リードが振動をしてマウスピースにあたり、まるで拍手の様な打撃音の原理で鳴っているものだと思っていたのです。

実際、リードはマウスピースに触れてはいるものの、マウスピースに当たって発音している打撃音ではなく、単に振動しているだけであることを知りました。目からウロコ状態でした。

リードがマウスピースにあたって発音している打撃音であれば、リードの硬さや材質が大変重要な要素となりますが、そうではない。リードが単に震えているだけであれば硬さや材質よりも、いかに振動しやすいかがリード楽器にとって最も重要な要素ではないかと思いました。

そこで、振動しやすいリードとは?と考えた時、硬いリードより柔らかいリードであるという結論に達しました。

そして、早速柔らかいリードを試そうと思い2番のリードで試したところ、最初はベー!と言う音でしたが、どうすればベー!と言わなく吹けるのか、試行錯誤を重ねるうちによい感じで吹けるようになりました。

調子に乗った私は遂に1半のリードを試そうと思いました。2番よりさらに柔らかなリードです。まず、入手が困難でした。リードの輸入元から「1半は輸入していない」と回答がありましたが、無理を言ってオーダーし、やっと入手。

早速、息を入れてみて驚きの瞬間を迎えます。

2番よりさらに柔らかいことは想像していましたが、2半から2番にした時よりさらに驚くべき事態が起こりました。良い音を出そうとすると、とにかく息が余るのです。息が余って過呼吸状態になり、まるでオーボエ奏者のように息を吐き出してから再度ブレスを取る、そんな感じになってしまいました。



クラリネットアンサンブルコンクールで演奏する安川さん

この事態を打開するにはどうすればよいのか? 試行錯誤しました。

その時です。幼い頃に大好きだったリコーダーでの息づかいを思い出しました。

皆さんもリコーダーは小学生の時に練習しましたよね。あれです。リコーダーを吹く時のブレス、そしてその息づかいで、1半のリードはいい音で反応してくれます。

硬いリードを振動させるには多くの圧力と息の量がいりますが、柔らかいリードを振動させるにはほんの少量の圧力と息の量でよいことがわかりました。

最近3歳の孫に1半のリードを付けたクラリネットを吹かせたら、ポ〜と柔らかな音楽的な音が出ました。

クラリネットは硬いリードを使わなければならないという固定観念に縛られ、挙げ句の果ては吹くことが辛くなり辞めていく、本人にとってもクラリネット界にとっても大きな損失だと思います。

柔らかいリードで演奏するようになって、私はクラリネットが大好きになりました。

遂には昨年、自分の還暦のパーティーにてクラリネットを演奏しました。クラリネットを演奏する人なら誰でも憧れるモーツァルトのクラリネット協奏曲全楽章を、招待した360名のお客様の前に披露したのです。

指は回っていませんが、音色やそれなりの歌い回しが出来たかなあ、と自画自賛しています。ご興味がある方はYouTubeで映像と音声を流しておりますので、一度視聴してみてください。



モーツァルトのクラリネット協奏曲を演奏する安川さん

柔らかいリードがもたらすメリット

1. 息の量が少なくて済む。
2. 唇は思い切り緩め息が漏れない程度のアンブシュアで吹けるため、長時間の練習に耐えられる。
3. 体に力が入らないので、フィンガリングがスムーズになり、今まで吹けなかったパッセージも容易に吹けるようになる。
4. ロングトーンの時間が短縮される。(必要がなくなる。)
5. 音程が飛躍的に良くなる。
6. 音抜けのムラが無くなる。
7. リードを選ぶ事が楽になり一箱10枚の内8枚は使えるようになる。
8. 元々コシが無いへたったような柔らかさのリードのため、硬いリードの3倍は長持ちする。
9. 音色が柔らかくふくよかな響きになり、特にアンサンブルの中で溶けやすくなる。
10. 何よりもクラリネットが大好きになります！

(注、7と8は楽器業界の社長が言っていたことは内緒にしておいて下さいね！)

もう1つお願い

「初心者が柔らかいリードを吹くのは難しいから無理」と思わないでください。初心者の方たちは硬いのも柔らかいのも認識しないまま素直に受け入れます。それが証拠に3歳の孫は初めてクラリネットに息を入れたにもかかわらず、クラリネットらしい

良い音を奏でました。

教える方が柔らかいリードを使用していなくても大丈夫です。

■質問とお問い合わせ先 infod@dolce.co.jp